



公益財団法人

国際文化フォーラム  
THE JAPAN FORUM

# 国際文化フォーラム通信

2012年10月

no. 96

## 解をつくりだす

◎ひとりがリーダーとなり決断して答えを出す。そんな時代はすでに終わりを告げました。自分なりに考えた解をそれぞれがもち寄り、それらを総合的に判断、議論して、誰もかもっていない解にたどりつく。◎激しいスピードで変化し、想像もできなかった課題に直面する社会にあっては、そんなアプローチが求められているのです。



### 【特集】

#### 解をつくりだす……………2

- 「21世紀型スキル」をすべての子どもたちに
- 日本が取り残されないために
- 教室外でも活用できる英語を
- 「考える科」と他教科との連携が高次思考力を育む

### TJFニュース……………10

- TJFの事業を支えてくださっている皆さま
- 同じ高校生として  
たくさんのお話を話した10日間
- 「学習のめやす」研修、4年の成果  
……ほか

### 掲示板……………16

# 21世紀型スキルを育む

特集 解をつくりだす

TJFが3月に発表した『外国語学習のめやす2012』では、多様な言語や文化的背景をもつ人たちがともに暮らす社会のなかで、生徒たちが学習した言語を使って社会的な活動ができるようになることをめざしています。それには言語運用と文化理解に加えて、さまざまなスキルや能力(コンピテンシー)の養成も重要であり、外国語教育こ

そこのような力を育むことに大きな役割を果たせると提案しました。

## ▶ 「めやす」が注目した21世紀型スキル

「めやす」は、21世紀型スキルとして挙げられているさまざまな力のなかで「協働力」「高度思考力」「情報活用力」に焦点をあてました。「協働力」は、ことばも文化

的背景も異なるメンバーが、考え方、価値観、感性の違いを乗り越え、協力して作業できる力だと考えました。「高度思考力」は、問題解決のために、資料や状況を客観的に解釈・分析したうえで、自分の考えをまとめて発表できる力です。これは、これまで外国語教育で重視されていた記憶力や読解力よりも高度な力を指しています。「情報活用力」は、情報を収集・編集・発信する際に、メディア・テクノロジーの特性を理解したうえで、活用することができる力です。

## ▶ 教室での実践のために

特集では、21世紀型スキルを研究する国際プロジェクトに参加している三宅なほみ(東京大学大学院教授)に、そのスキルの本質は何か、新しさはどこにあるのか、そしてそれらの力を養成するためにはどんな学びが必要かを明らかにしていただきました。

21世紀型スキルを育成する具体的な方法として、「知識構成型ジグソー法」を使った英語科の取り組みと「シンキング・ツール」を取り入れた理科と数学科の実践を紹介します。



## 「21世紀型スキル」をすべての子どもたちに

東京大学大学院教育学研究科教授  
大学発教育支援コンソーシアム  
推進機構(CORE)副機構長  
**三宅なほみ**



「21世紀型スキル」とは、シスコ、インテル、マイクロソフトの3社と豪州メルボルン大学の研究者などが中心となって呼びかけ、これからの知識産業社会に必要なスキルを同定し、その教育方法を国際的な協働態勢で開発しようと立ち上げたプロジェクトが、そのスキルの総称として使っている用語である。プロジェクトは、OECDとも連携して、Assessment and Teaching of the 21st Century Skills (略称、ATC21S)と名づけられ、多数の学習科学研究者も協力して活動を続けており、2010年には研究の成果が白書にまとめられている。

ATC21S (<http://atc21s.org/>) では21世紀型スキルを、これからの社会を生きていくために身につけるべき力として、次表のようにカ

テゴリに分けてそれぞれの要素となるスキルを挙げている。

カテゴリ	スキル
考え方	創造性、批判的思考、問題解決、意思決定、学習
働き方	コミュニケーション、協調
仕事のための道具	ICT、情報リテラシー
生きるためのスキル	良い市民であること、生活と職業、個人的・社会的責任の取り方

ATC21Sプロジェクトは現在、ここで示されている考え方(概念)を、実際の授業で子どもたちが実現する(実行に移す)ための具体的な方法を探る段階に入っているという。そして、その作業のために、上

の項目をすべて次の二つの領域に包括している。

協調的問題解決：共通の問題を一緒に解くこと。アイデアや知識、もっているリソースを提供し、交換してゴールを達成する。ICTリテラシー、デジタル化されたネットワークで学ぶこと：社会的ネットワーク（複数の人で協力しながらネットワークを活用すること）、ICTリテラシー、テクノロジーについての知識、シミュレーションなどの手法を駆使して、学ぶ。これらの手法によって個人は社会的なネットワークのなかで自分自身の役割を果たすことができ、社会的、知的資産の生産に貢献する。

これらが、21世紀型スキルと呼ばれているものの「本体」にあたる。前ページの表で挙げたすべてのスキルがこの二つの領域におさまっており、さらに、2015年にOECDが実施するPISAテスト問題に新たに加えられることになっている。

高度に知的なスキルであると同時に、世界の経済的・技術的発展を見据え、それを牽引するスキルとして提唱されていることがわかる。しかし、具体的なようできて、抽象度が高い。「問題を一緒に解く」といっても、具体的に何をしたらいいのかは明示されていない。「問題が解けた子に、まだ解けていない子を教えさせる」「一つのテーマについて新聞や本を調べ発表させる」といった単なる「教え合い」やグループ作業では、協調的な問題解決能力の育成にはつながらない。

協調的な問題解決の本質は、一人ひとりが「すでに（なんとなくでも）わかっていること」をもち寄り、全員の見方や考え方を積極的に取捨選択し、統合することを繰り返して、「はじめに考えていたよりもずっと自分でも納得できる解」に到達することにある。

このような学び方を身につけるには、新しい学習観にもとづく学習方法の見直しが必要である。「人はいかに学ぶのか」についてこれまで以上に詳細な分析にもとづいた教授学習方法を試験的に実施し、さらにその実施の仕方を変えながら、少しずつ成果の質を上げていく努力が求められている。ATC21Sそのものは、まだその道筋を示していない。ゴールの抽象度が高いだけに、教育現場でどう実現するかは、教育に関わる私たち自身の判断にかかっている。

## 21世紀型スキルをどう育成するか

前ページで挙げた四つのカテゴリとスキルは、実はそれほど目新しいものではない。それに対して「それらを包括する」二つの領域、「協調的問題解決」と「デジタル化されたネットワークでの学び」が示す内容は、技術的にも学習形態としても、また学びのゴールとしても新しい。なかでも、最も顕著に違うのは、これまではエリートへの到達目標として挙げられていたようなスキルが、これからは地球上のすべての教室で、生きて働くすべての人にとって獲得可能でなくてはならないものとして宣言されていることだろう。これからの世界的な課題は、一人ひとりが自分で判断して行動できることが前提であり、傑出した少数のリーダーに他が従うといった図式では解決できない。一部の人がICTを駆使して協調的に難問にチャレンジすればいい時代で

はない。一人ひとりが、自ら学び、自ら判断して、自分の考えと他者の考えを統合し、それまでにはなかった解に行きつくことが求められる。

そのために、私たちは協調的な学びが有効だと思っている。協調的な学習がめざしているのは、学びのゴールも解も一つではなく、協調的問題解決を可能にするスキルであり、一生学び続けるためのスキルの獲得である。

教室で学ぶことが、教室のなかや教科書に閉じ込められたものではなく、世界的な課題の解決につながるとしたら、その学びを支えるために、インターネットをはじめとするさまざまな情報発信のツールや、考えていることの正しさを検証するためのツールを、学び始めるときから、ニーズに合わせて駆使できなければならない。そういったツールの使い方は、手順を教えて身につくものではない。実際に解くべき問いがあり、答えを出すためにどうしてもこのツールを使いたいという要求が子どもたちに自然にうまれるような授業を考え、それを持続できる学習活動を組むことによって、ツールは日常的に使われて子どもたちの「手になじむ」ものになっていこう。そうなったツールは、子どもたち自身が自分の考えを、他の人の考えとすり合わせ、統合して自分の知識や理解を深め、その適用範囲を広げていく協調的な学習を支えるだろう。

ATC21Sが挙げる二大テーマは、この意味で、互いに深く関連し合っており、二つを同時に推進することが期待されている。

## 望まれる学習環境

ATC21Sの白書に、21世紀型スキルを育成するための学習環境について説明がある。

これまで必要とされたスキルは、個人が科学的な知識を正確に把握することや、与えられた問題を効率よく解くことが中心だった。これらは、初心者かどのようにゴールに到達すればいいかを探ることによって教えることができた。これに対して、21世紀に必要なスキルは、学習者が互いに理解を深め合い、あるゴールに到達するにつれて新しいゴールを見出し、自ら設定した新しい課題を解きながら前進する創成的で協調的なプロセスを引き起こすスキルである。

そういったスキルの涵養には「知識を新たに構築することが奨励される環境」が必要になる。そこでは、メンバーがそれぞれ自らの問題を解決しつつ、チームで解くべき問題を共有し、共通した問題解決のために貢献する。メンバーは、それぞれの強みをいかしつつ、社会的責任を果たす相互支援関係を成り立たせることを学ぶ。このような環境のもとで、新しいスキルだけでなく、これまで重要だとされてきたスキルも獲得されることがわかっている。

最近の研究では、人が複数で話し合うことが学びを引き起こす仕組みと、それを現場にいかすための原則が少しずつ明らかになってきた。日本でもこの分野の先進的な研究がいくつか見られる。私たちCoREF（大学発教育支援コンソーシアム推進機構）は現在、全国

20余の自治体と連携して、小中高校のさまざまな教科で協調的な学びに取り組んでいる。協調学習<sup>\*</sup>の背景となる理論や実践の実態、評価方法、成果などの実態については、公開サイト (<http://coref.u-tokyo.ac.jp/>) を、またその高等学校での実践例については「教室外でも活用できる英語を」(pp.5-7)を参照していただきたい。

私たちは、協調的な学びを教室に取り入れる一つの方法として知識統合型ジグソー法を用いている。この型の原理になっているのが、ふたりで一緒に問題を解く過程を詳細に分析して得られた「建設的相互作用」という考え方である。ある問いに対して、それぞれがこれまでの経験や知識にもとづいて、少しずつ異なる視点から独自の解を構築する一方、他人の視点を利用して、それまで自分が解だと思っていたものを少しずつつくり替え、適用範囲を広げて、より質の高い解に到達する姿が明らかになっている。

簡単にいえば、自分でこうだろうと思っていることを他人に説明しようとする、すぐにはわかってもらえないので自分で自分の考えを見直し、つくり直すことになる。他人の説明を聞いているときには、他人がなぜそのような考えをするのかと思いを巡らしつつ、同時にそ

の考えと自分の考えを対比させ、両者を俯瞰するような視点をもとうとする。複数の人で同じ問題を解こうとすると、この二つが交互に起きて、その結果、一人ひとりが、自分の考えをより抽象度の高い視点からつくり直すことになる。

実践例で具体的に紹介している知識構成型ジグソー法は、この建設的相互作用を教室で、短時間に、教科書にある課題を使って実現するために生み出された方法である。

CoREFのプロジェクトでは、こうした授業が展開されるようになって、児童・生徒がこれまで以上に学びの主体として活躍する姿が見られるようになってきた。成果として、子どもたちからは「大事なことがすっと頭に入ってくる」「次々知りたいことが出てくる」、教師からは「分担した部品を『伝えたい』と思う状況を経験し、伝え方を工夫することによってコミュニケーションスキルの基盤をつくることができていく」「話し合っただけで自分の考えが良くなる」体験を通して、協調的な問題解決が好になり、そういった問題解決を体現できる」などの報告がなされている。

## 日本が取り残されないために

**横尾俊彦**

佐賀県多久市市長

私が「21世紀型スキル」のことを知ったのは、今年の1月、ロンドンで開催されたEducational Leaders Briefing(ELB)に参加したときのことです。これからの子どもたちに必要な力を、多角的、本質的、長期的という重要なポイントできちんと押さえていると感じました。ELBは、世界教育フォーラム(Education World Forum)にあわせてブリティッシュカウンシルとマイクロソフト社等が共催しているイベントです。世界各国から多くの人が参加されていましたが、日本人は私を含めて2人。一方、韓国やシンガポールなどからはたくさんの方が参加していました。これでは日本は取り残されると危機感を抱きました。

最初は多久市だけで21世紀型スキルを取り入れた教育を展開しようと思いましたが、教育を大きく変えるには国策としての視点が必要です。そのために、まず自分のもっているネットワークやこのテーマに共鳴する人たちと学ぶ機会をつくらうと考え、『「21世紀型スキル」フォーラム有志市長の会」を立ち上げました。有志市長の会といっても、世話人である私ひとりでのスタートでした。これまで一緒に仕事をしてきた市長グループの人たちに働きかけるところから始め、何人かの賛同を得て、5月に東京で「世界に通用する人材育成のための『21世紀型スキル』フォーラム」の開催に漕ぎつけることができました。会場には55の自治体から首長や教育長など約100人が集まりました。これまで聞いたことがない教育内容を初めて耳にし、ショックを受けた人も多くいたようです。

21世紀型スキルはこれからの教育を考えるうえで非常に大事

であるとのコンセンサスが、少しずつ広がっていることを実感しています。

これからを担う次世代に必要な教育を与えるのも行政の大切な仕事です。多久市ではそのための予算を確保し、ハード面の整備に着手しました。各学校にはすでに全教室分の電子黒板が整備され、活用されています。次はタブレットPCの導入です。

しかし、こうした機器を取り入れれば自動的に21世紀型スキルの獲得ができるというものでは必ずしもありません。大事なのは教育の中身、子どもたちの人間力を高める学びのあり方をどう変えていくかです。教員全員に研究授業をしてもらったり、保護者も含めた授業研究会を行ったり、それぞれの立場で多久市の子どもたちの教育を考える場づくりも大切です。

私が教育で大事にしているのは、「知仁勇」。「知」は知ること、「仁」は人のことを慮ることができること、「勇」は知って正しいと思ふ人のためになるとわかったら勇気を出して行うこと。こうした人間力の基本を軸に置きながら、21世紀型スキルを身につけてもらい、過去と未来をつなぐ温故知新の教育をこれからも進めていきたいと考えています。

インタビューをもとに、TJFが構成しました。

### 世界に通用する人材育成のための 第2回「21世紀型スキル」フォーラム

日時……………2012年11月14日(水) 17:30~19:30  
場所……………千代田放送会館(千代田区紀尾井町1-1)  
対象……………自治体首長・教育長およびその関係者  
定員……………100名  
問い合わせ…「21世紀型スキル」フォーラム事務局  
TEL: 03-5774-7012



※協調学習…学習者が、他者との関わり合いのなかで自らの理解を深め、共有する問いへの答えを新たにつくりだしていく学習活動原理。海外では一般にcollaborative learningと称される。これに対し cooperative learning という名称もある。「協調学習」が「一緒に活動することで、参加メンバー一人ひとりの理解やスキルが、参加した活動の前よりレベルが高くなること」を意味するのに対し、後者は「一つのことを成し遂げるために一緒に活動することそのもの」が含意され参加メンバーの考え方やスキルが変わることは期待されていない。

## 次の学びのために

この方法は教師にとっても、児童・生徒一人ひとりが何をどこまで考えているのかが捉えやすくなる。なぜなら、教師が一方的に説明する場合、子どもは黙って聞くだけなので、何を考えているのかデータが集まらない。学び合うクラスでは全ての子どもがそれなりに「話す」ので、「全員の声を聞く」ことも不可能ではない。知識構成型ジグソー法には、ほぼ全員に考えながら話すチャンスが自然に生まれる仕組みが埋め込まれているからである。このことによって、教師は子ども

の潜在的な学ぶ力を見直すことにもなる。さらに子どもの考え方を捉えることによって、次の授業の展開が考えやすくなるなどの利点が指摘されている。

この利点をさらに高めるためには、ICTの活用も必要になってくる。ICTを活用すると、多くの場合、子どもたちがそのツールを使った軌跡が残る。つまり詳細な学習プロセスの記録が残り、それを後から分析して「人はいかに学ぶか」という、まだわかっていないことを見つけ出せる可能性もある。

21世紀型スキルという新しい学習目標は、どういった生き方をしたいか、そのためにどういった学びを推進したいかを各人が問い直すことによって始めて、子どもたちだけでなく、私たち自身の手になじむものとして取り組むべきものではないか。21世紀型スキルは、私たち一人ひとりが「これこそ次の世代の人たちとも共有したい」と心底思えるものであるべきだし、育成にあたっては、教師が目の前の子どもたちにとって何が一番自然で価値があり、難しくてもやり続けようとする魅力があるかをその場で考えて実践し、実践を繰り返して教える方そのものの質を高めていかなければならないだろう。

[みやけ・なほみ]



# 教室外でも活用できる英語を

埼玉県立浦和高等学校教諭  
小河園子



教室外でも使える英語とは何なのか。それは、自分で考え、自分で判断して使うということだろう。例えば、駅から学校までの道を示すときに、教室ではgo straight、turn at the cornerといった表現を練習する。しかし、実際にはある地点までは大型スーパーを目印にし、そこから信号の数を教えるほうがわかりやすいとすると、いろいろな表現を組み合わせる案内するのがいい。このときに必要なのは、英語力だけでなく、どのような道案内がいちばんわかりやすいかをとっさに判断する力や思考力であり、これらをすべてつなげなければいけない。このとき初めて教室外でも使える英語になるのである。こうした力も英語の授業で培っていききたい。

している。この事業では、授業に協調的な学習を引き起こすために、知識構成型ジグソー法の授業づくりに取り組んでいる。

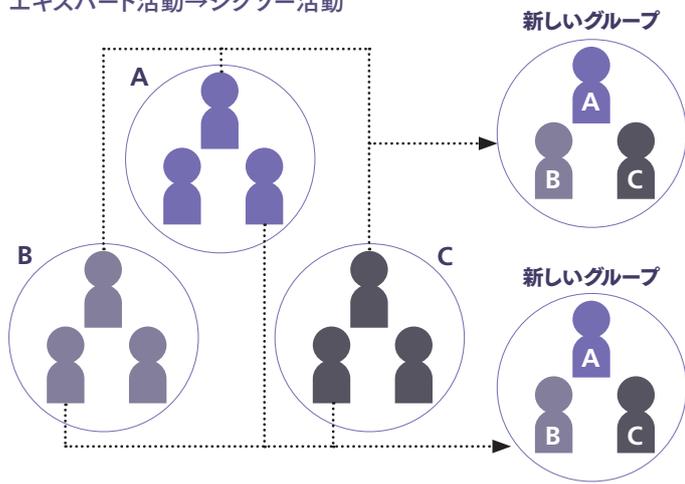
ジグソー法では、設定された問いに答えるために、まずクラスを数グループに分け、各グループにそれぞれ異なる資料を与える。各グループは話し合いながら、その資料の内容や意味を探る(エキスパート活動)。次に、各グループから1人ずつが参加した新しいグループをつくり、各人が前のグループで得た知識や情報を出し合い、そ

## 1 「答えを出してほしい課題」をめぐる

私は、埼玉県がCoREF(大学発教育支援コンソーシアム推進機構)と連携して進める「学力向上基盤形成事業」に平成22年度から参加

それぞれの解をもち寄って、「カレンダーはなぜ必要か」に対する解を導きます。





それぞれの情報を組み合わせて、答えをまとめる(ジグソー活動)。最後に、グループごとに答えとその根拠を発表し、みんなで検討する(クロストーク活動)。

ジグソー法の授業づくりは、「答えを出してほしい課題」設定から始まる。この事業のワークショップに初めて参加したとき、実践事例として紹介された授業の目標が非常に明確であることに衝撃を受けた。例えば、小学校の理科では「雲はなぜできるのか」、社会科では「日本はなぜハイブリッドカーで勝負しているのか」という問いに答えを出すことが目標なのである。

いくつかの実践を経て私は、教科書のテーマを参考に生徒の思考力と英語力を考慮し、問いと資料を考えるようになった。問いは英語の学習に特化したものというより、むしろ母語でも問う価値のあるものに重きをおいて選んだほうがよいと感じている。生徒の知的欲求も満ち、考えを深めることができると思うからである。

## 2 概念語を捉える

一つの例を紹介したい。高校2年生という発達段階を考えて「標準」という概念を英語で理解させるために、「カレンダーはなぜ必要か」という問いを設定した。エキスパート活動の英文資料は下の(A)～(C)の内容で、いずれも120語程度で、辞書を使わなくても読めるレベルのものとした。

- (A) 無人島でロビンソン・クルーソーがカレンダーを作ろうとした話 (1年生の時に読んだホームリーダーからの引用)
- (B) 逆周りの時計があったらどうなるだろうかという話(易しめの教科書から引用)
- (C) 国際宇宙ステーションでの標準時の話(授業前日の若田光一宇宙飛行士の講演をヒントにした小河の書下ろし)

表 What functions does a calendar have in your daily life? (授業前後の同一生徒の回答、原文のまま掲載)

授業前	授業後
It has the function to identify my schedule.	It has the function to make a common system.
It tell me my birthday.	We need common date and it can tell us correct date. So, it's necessary for our daily life.
A calendar have a function that let my life is going smoothly.	A calendar creates our standard of living. Without being the standard, we can't keep regular hours and feel relieved.

課題と関連づけて各グループで資料を読解した結果、(A)では自己管理、(B)では基準がないと混乱する、(C)では協力するために基準が必要、と解釈していた。

この実践では、授業の最初と最後に、一人ひとりに課題に対する答えを英作文してもらった。下の表を見ると、授業を受ける前に比べて後の作文では言語表現が複雑化するとともに、内容に関する考察も深まっていることがわかる。エキスパート資料として与えられた英文が、主題に対する生徒の考えを膨らませ、英語表現を引き出す媒介になったと考えられる。また、ジグソー活動でも英文の資料をもっていたことから、英語を交えて話し合いを行うグループが多かった。協調学習は一人で自己完結する活動ではない。話し合いのなかで相手から出てきたことばの意味を考え、資料をもう一度読んで使ってみることで、授業の前に比べて後では言葉の数が増えている。こうした過程が学びだと思う。

このほかにも、「時計が時計回りなのは時計が発明された北半球で日時計が「時計回り」だったから。すなわち、基準は人がつくるものではなく、基準と人が認めたものが基準になる。国際標準時も同じ」といったユニークな意見も出された。

このように生徒が日本語の世界ですでも持っている知識や思考力を引き出すことができることも、協調学習の魅力のひとつであり、その段階まで至れば、より確実な記憶として定着することがその後の追跡研究でわかっている。このような概念語とそれにつながるエピソード的な話題をいくつかもっていれば、将来、社会にでたとき、実務以外の雑談的な会話が苦手とされる日本人の英語学習の欠点を補っていくこともできるという副産物も生むのではないだろうか。

## 3 答えがすぐに出ない問いを立てる

こうした英語力の重層的な向上とあわせて、協調学習で答えがすぐには出ない問題に取り組むことで得られることも多い。協調学習を初めて実施するとき、生徒の多くは落ち着かない。貧乏ゆすりをしたり頭をかいたりして、すぐに答えがでないことにいらだっているのがよくわかる。いったん答えを出すと、それに対してすぐに○×による即

時裁定的評価を求めたり、グループで自分の意見が反対されたり、相手に聞き返されたりしただけで、自分自身が否定されたように思ってしまうこともよくある。

それが、協調学習を重ねていくことで、すぐに答えがでなくても、反対意見を言われてもいいのだと思うようになってくる。自分が否定されたのではなく、自分の意見がちょっと修正されただけであって、みんなで共有できるのだという感覚が育っていくのがわかる。これは、コミュニケーションに対する前向きな姿勢が育っているということ、コミュニケーション力につながっている。英語に限らない学習の基礎の基礎が培われているのである。

いわゆる受験校での授業と協調的な学習が対極にあるかのような先入観が一般に多いのではないかと思う。私もつい最近までそのように考えていた。しかし、協調学習がめざす自律的・個別的な学

習の姿や、その場限りではなく教室外で再利用できる知識の構築は、「受験」で問われることと同じではないだろうか。受験問題でも、単に単語や熟語、構文を覚えていればできるというものではない。例えば、生物学的なテーマの長文を読み、それに対して論理的な意見を記述することが求められたりする。単なる丸暗記では対応できず、主体的に知識を構築し、わかりやすく表現する力が求められるのだ。さらにいうと、「受験」はあくまでも通過点であり、当校の英語科の目標は、世界の一角を支える人になるための英語力を身につけさせることにある。受験校によくあるような最短距離を求めがちな環境で、あえてまわり道をするから見えてくることもあることを自分も生徒も学んでいるように思う。

[おがわ・そのこ]



## 「考える科」と他教科との連携が 高次思考力を育む

江守恒明  
(情報科「考える科」)



森広志  
(数学科)

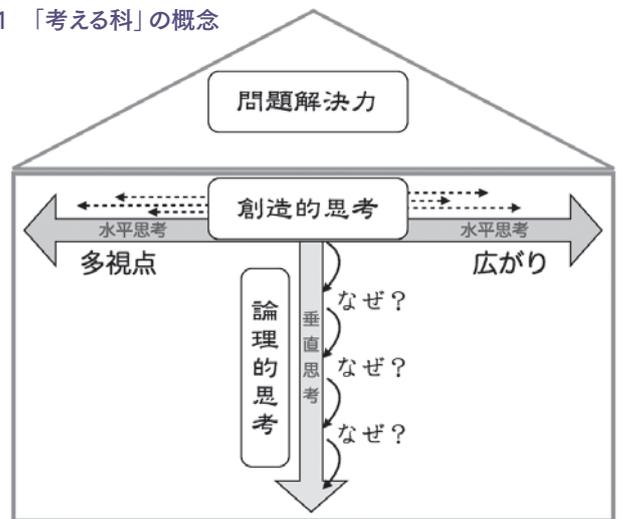


松村湖生  
(理科)



近年、思考力の育成に対する関心が高まっている。思考力は、すべての教科の基盤となる能力であるため、子どもの思考を促す工夫や思考する学習場面をさまざまな教科に埋め込んでいくことが重要である。さらに、発達段階に応じた学習課題の設定も考慮しなければならない。つまり、思考力の育成には、教科間や学年間の連携といった「教科・学年のレベル」、さらには「学校運営のレベル」を包括的にデザインする必要がある。その観点に立ち、2010年に開校した関西大学初等部・中等部・高等部では、全校をあげて「高次思考力」の育成に力を注いでいる。新しい学校のコンセプトづくりの段階では、21世紀スキルズも念頭に置いていた。

図1 「考える科」の概念



### 1 考えを深めるために

現在、初等部で取り組んでいる「ミューズ学習」では、「比較する」「分類する」「関連づける」「多面的に見る」「構造化する」「評価する」の六つの思考スキルを習得するための学習を行っている。

中等部では、1年生から2年生まで各学年に週1時間の「考える科」を実施している。「考える科」では、ベン図やイメージマップなど考えを進める手続きや、それをイメージさせるシンキング・ツール<sup>\*</sup>の使い方やディスカッションの方法、効果的なプレゼンテーションスキルなどを習得させるとともに、アイデアが生まれるしくみや錯視が起こるしくみなど脳における思考のメカニズムそのものも理解させる「考え方そのものを学ぶ」授業を展開している。

「考える科」は独立した科目であるが、ここで教えた内容が他教科に広がり、さまざまな場面で生徒に活用されてこそ、価値のある科目となる。具体的には、自分の意見や考えをうまくまとめること、自分の意見をわかりやすく伝えること、話し合いや発表で互いの考え方を理解することなどである。そして、知

<sup>\*</sup>シンキング・ツール……関西大学初等部・中等部では黒上晴夫関西大学教授が中心となって開発したシンキング・ツールを活用している。シンキング・ツールは冊子としてまとめられている。以下からダウンロードできる。また、さまざまな実践例も紹介している。

▶ <http://tt.ict-education.org/>

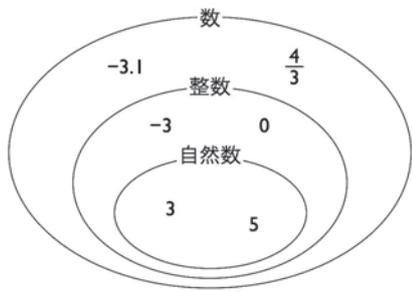
的好奇心をもって、一人ひとりが深く考えることができるようにすることが「考える科」のねらいである。「考える科」の概念は図1に示したとおりで、論理的思考(垂直思考)や創造的思考(水平思考)を養い、問題解決力の土台となる部分を身につけさせることを目標としている。

ここでは「考える科」での学びがどのように他教科へ広がっているかを、中等部1年生の数学と中等部2年生の理科を例に紹介する。

## 2 中等部1年生の「数学」での取り組み

「数学」では、はじめの単元「正負の数」で数の集合について学習する。その際、数の範囲を表すために、図2のような図を用いて説明することが多い。授業内容は、この図を参考にしなが

図2 数の範囲



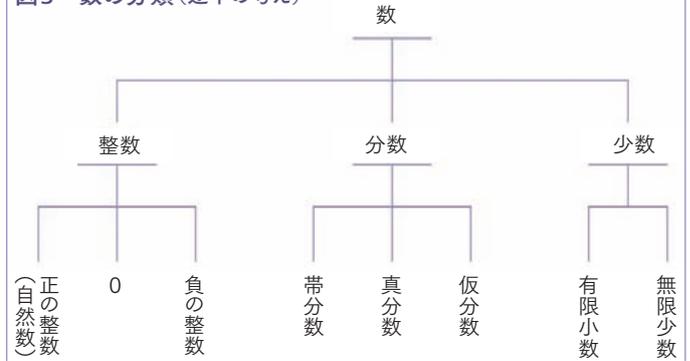
ぞれの範囲内で四則演算がいつも成り立つか、成り立つとは限らないかを考えさせるものだが、今回はこれを発展させ、数の種類や数の分類を考える授業を行った。

数の分類という観点から改めて図2を見ると、そこには含まれていない数や同じ範囲に含まれる数でもさらに細かく分けることができる数がたくさんあり、数の分類に関して、十分とはいえない図であることがわかる。そこで、さらに細かく分類するためには、どのような図を用いて考えるのがよいかを検討し、ここでは「考える科」で活用したシンキング・ツールのなかから、ツリーマップを利用して分類することにした。

図2では、数、整数、自然数という三つの分類しかないが、まず整数以外の数として分数と小数がある。また、分数には帯分数、真分数、仮分数があり、小数には有限小数、無限小数があるとの意見がでた。

そして図3のようなツリーマップを作っていく過程で、新たな疑問が生じた。有限小数である1.25と帯分数の $1\frac{1}{4}$ 、仮分数の $\frac{5}{4}$ は、表記方法が異なるだけ

図3 数の分類(途中の考え)



で、全て同じ数を表しているということである。

では、どのように数を分類していけばいいのか。生徒たちに数に関連したことばで聞いたことのあるものをあげてもらいと、有理数、無理数、複素数といった中学1年の段階で扱う範囲外のことばがあがった。さらにそれらを調べていくと、それぞれがどういった数なのかを知ることができた。そうして完成したのが、図4のツリーマップである。

このように、適切なシンキング・ツールを用いて書き表していくことで目的を達成できたばかりでなく、頭の中で考えているだけでは気づかないことに気づき、作成途中に新たな発見をすることもできた。また、図4を完成させる作業のなかで、中学1年で習う内容を超えたさまざまな数について、興味をもって調べることができた。

## 3 中等部2年生の「理科」での取り組み

中等部2年生の理科の学習内容の一つとしてエネルギー資源を扱う単元がある。生徒はさまざまな発電方法を学習していくのだが、特に原子力発電に関しては、エネルギー変換だけでなく、危険性や環境問題なども含んでおり、教科の枠にとらわれず総合的に学習を進めたいと考えていた。そこで、生徒たちがメディアから東北地方のさまざまな情報を目にするであろう、東日本大震災からまもなく1年が経

図4 数の分類(ツリーマップ)

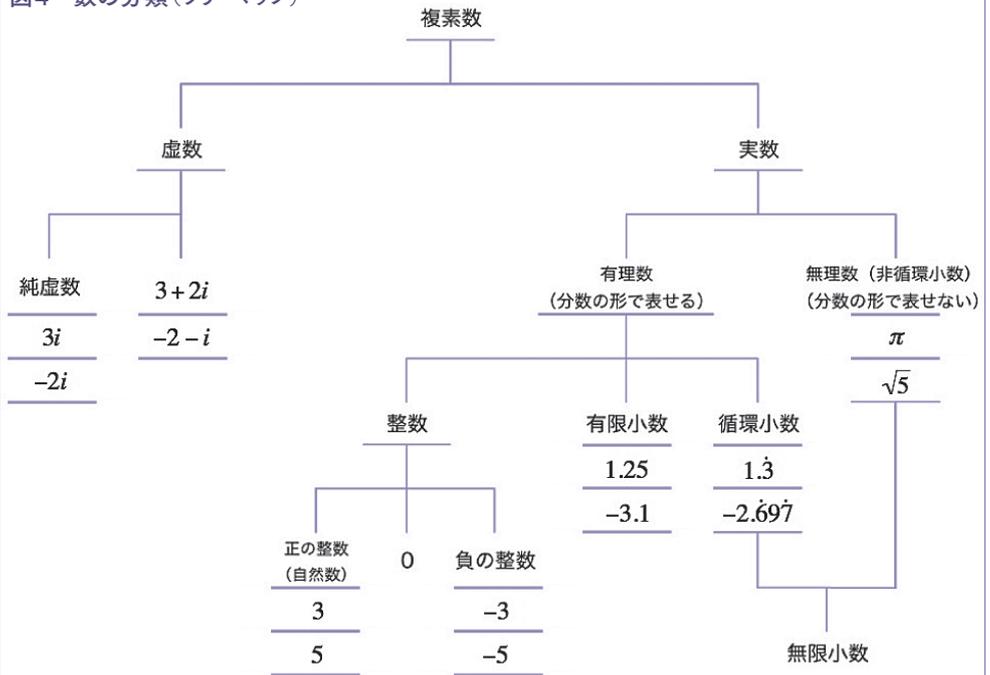


図5 フィッシュボーン

中等教育課程理科の「考える科」サッカーディベート資料

### ボーン図

ディベートのテーマ  
原子力発電所は必要である  
(賛成・反対)

哲学

J2( )組 氏名( )

理由①

理由の根拠

理由②

理由の根拠

理由の根拠

理由③

理由の根拠

理由④

うとしている時期に「考える科」とコラボレーションして、原子力発電について多面的に考える授業を行うことにした。

生徒一人ひとりがニュースや新聞から得た情報を正しく読み取り、自分の考えにもとづいて行動できるようになることを目的として、この内容に関連する理科の授業において“原子力発電所は必要である”というテーマに設定したディベートを授業のメインの活動にした。「考える科」の授業において、これまで「ものごとを調べる方法」「よいプレゼンテーションとは何か」「水平思考の発想力」「質問する力」について学習しており、理科のなかでそれらを活用することもこの授業のねらいであった。この一連の学習には8時間をあて、次のように進めた。

#### ①福島第一原発の事故について調べる(2時間)

本校の新聞データベース検索システムを利用して、平成23年3月11日とその後の新聞から、さまざまなキーワードをもとに、福島第一原発の事故がなぜ起きたのかを調べた。わからない語句や事柄については、学校の図書館で辞典や本を利用して調べた。2時間目には調べた新聞記事をeポートフォリオ(学習内容や学習履歴をサーバで管理する本校独自のシステムで、生徒はコンピュータで個人のポートフォリオにアクセスできる)に添付し、要約してまとめた。

#### ②ディベートの準備(3時間)

各班のなかで賛成側と反対側に分かれて、それぞれの哲学(立論の信念や論拠となる柱のこと)を話し合った。例えば、賛成側の哲学は「日本の電力を支えているのは原発である」、反対側の哲学は「原子力発電所は常に危険と隣り合わせである」というように決める。哲学を決めたら、シンキング・ツールの一つであるフィッシュボーン(図5)を使って理由を考え、記述し、それをもとに発表用の原稿を作成した。

#### ③ディベート「原子力発電所は必要である」(3時間)

ディベートは「考える科」で体験したサッカーディベート\*の形式で行った。各班はディベート本番の直前に、自分たちが賛成側か反対側かを知らされ、準備した原稿をもとにディベートを始めた。ディベート中は、相手の話した内容を、いいところ(Plus)、悪いところ(Minus)、おもしろいこと(Interesting)別にシンキン

\* サッカーディベート……国際ディベート学会会長 松本道弘氏が考案したディベート形式。人間の論理を知的な面(石と風)と情的な面(火と水)に分け、その四つおよびそれらが交差する点(空)の五つの役割を各人が担い、ディベートを行う。

グ・ツールの一つであるPMIシートに記録し、作戦タイムなどに活用した。最後はあらかじめ用意しておいたジャッジシートを活用し、勝敗を決めた。

この授業を進めるなかで、一人の生徒が「自分は原子力については絶対に反対なので、賛成派になりたくない」ことを理由とともに文章にしてきた。メディアから流れた情報をもとに自分の意見をまとめて発信できる生徒がいたことははうれしく思ったが、ディベートはものごとを多面的に見るための訓練である。生徒には、賛成派・反対派両方の立場の意見をまとめてくるように話し、生徒も納得し準備に取り組んでくれた。

ものの調べ方やプレゼンテーションについては、繰り返し取り組んできた成果がでて、生徒たちはかなりうまくなってきている。本番のディベートでは、相手やジャッジを納得させるような話の進め方や話し方、また相手を困らせるような質問のやり方や切り返し方が必要となる。「考える科」で学習してきた「水平思考の発想力」や「質問する力」がもとになり、ディベートでの話し合いを活発に進めることができた。理科で学習した知識だけでなく、「考える科」で習得してきたさまざまな技能や思考力、そして表現力が活用できた授業であった。

## 4 より多くの教科と連携する

「考える科」は担当の江守と教科の先生のチームティーチングで行っている。今年、国語、数学、理科、技術の教師と組んでいるが、来年度は、社会、英語に広げていくことを考えている。そうすることで、今回紹介した数学や理科のように、「考える科」で学んだ内容が各教科でも利用されるようになる。活用場面を積み重ねていくことによって、生徒一人ひとりのスキルとなり、生徒が自ら考え、ものごとを判断し、表現できる力につながることを期待している。さらに、生徒自身が考え続けることにより、インプットとアウトプットがうまくつながり、問題解決力を身につけることができる。その時初めて「考える科」の目標が達成されたことになる。[えもり・つねあき][もり・ひろし][まつむら・こお]



## お知らせ

### ■TJFの事業を支えてくださっている皆さま

TJFは皆さまからご協力、ご支援をいただき事業を行っております。7～9月に以下の方々から寄附をいただきました。

○7月

佐々木倫子 様

○8月

静永健 様      金在滋 様

○9月

門脇薫 様      牧信之 様

### ■コラボレーターの活動

新たに3名の方々に〈TJFコラボレーター〉にご登録いただきました。

荻野裕子 様 「中国在住。上海から中国南部での活動の力になります」

堤純子 様 「日本語教育に関心があります。イベントの準備などをお手伝いします」

古谷聡 様 「中国在住。ウェブサイトや出版物の翻訳をします」  
7月に、平田絢香様、木内凜太郎様、八野嶺太様に「互いのこと

ばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」の準備作業を、また、照井はるみ様、馮小喆様には、「好朋友Web」中文版(www.tjf.or.jp/haopengyou/ch/)の中国語のチェックをしていただきました。また、齊藤孝様、永井壽子様には、千葉県内の学校で、「教育代表団派遣事業」の広報をしていただきました。ありがとうございました。

ゆるやかにつながりながら、TJFを応援して下さるコラボレーターを引き続き募集しています。

▶[www.tjf.or.jp/jp/collabo.html](http://www.tjf.or.jp/jp/collabo.html)

TJFの公式Facebookページで日々の活動の様子をお伝えしています。ぜひご覧ください。

▶[www.facebook.com/TheJapanForum](https://www.facebook.com/TheJapanForum) (藤掛敏也)

サマキャンのしおりの作成に協力してくれた八野さん。



## レポート

### 互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ 同じ高校生として たくさんのお話を話した10日間

7月23日(月)～8月2日(木)に、中国吉林省長春市で、「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」を開催しました。日本から86名、中国から53名の高校生が参加し、期間中は会場の長春日章学園高校で一緒に寮生活を送りました。このサマーキャンプは、お互いのコミュニケーションに必要な中国語・日本語を学ぶこと、学んだことばやジェスチャーなど自分のコミュニケーションツールを最大限に活用してアイデアや考えを伝えあい、違いを調整して新しい発想や方法を生み出す協同活動を体験することを目的としています。

中国の高校生がつくった日本語の新聞を読む日本の高校生たち。

### ■伝えあうためのことばを学ぶ

日本語の授業では、中国の高校生が自分たちの住む吉林省や長春市、学校生活を紹介するCMをつくって日本の高校生の前で演



サマキャン☆文化祭。  
自分で作った折り紙の  
カエルでレースに参加。



じたり、日中の高校生にインタビューして新聞をつくる活動などを行いました。新聞づくりでは、中国の高校生たちが休み時間に日本の高校生の教室に突撃インタビューに出かけ、一日の勉強時間、好きな人の有無、好きな歌、好きな中華料理、長春の印象など、それぞれが興味をもっていることを日本語で少し緊張しながらもうれしそうに質問していました。完成した新聞は食堂に貼りだされ、記事を読んだ日本の高校生が感想を書き込みました。

日本の高校生は、中国語の授業で学んだ表現を使ってオリジナル名刺をつくり、互いに自己紹介をしたり、中国の高校生の家庭を訪問するときに使う表現を学んだあと、その場面を想定してグループごとにスキットをつくって演じたり、協同活動で自分の意見を述べるための表現を学んだりしました。中国語を学校で3ヵ月勉強して参加した高校生は、「自分で考えて中国語を使う機会が多かった。習ったことを覚えるだけでなく、実際に使えるようになったことが自信になった」と語っていました。

#### ▣ ことばを使って伝えあ

日中の高校生の協同活動では、最終日にゲストを迎えて実施する「サマキャン☆文化祭」に向けて、グループに分かれて企画づくりやリハーサルなどを行いました。文化祭づくりは、日常会話ではなく共通の目標達成に向けて意見を交換したり調整したりするために、学んだ中国語や日本語を使います。最初のうちは、言いたいことを相手のことばでどう表現していいかわからず、日本の高校生同士、中国の高校生同士で話してしまい、お互いの考えを伝えあうことができないグループもありました。ある日本の参加者は、「中国の子が言っていることもわからないし、自分たちが言っていることも相手に通じなくて、お互いにもどかしかった。あまりに通じないと、だんだん聞く気もなく

なったりして……。でも、本番は迫ってくる。前に進むために、何とか伝えて、何とかわかりあってという感じだった。どうしても理解してもらえないときは、相手にわかりやすいようにやり方を変えたりした。ゲストは中国の高校生だから中国の人たちのやり方に合わせたほうがいいと思った」と文化祭づくりの過程をふり返ります。

また、企画や進め方についての意見の違いや誤解を早い段階で調整できずに、本番近くになって少し険悪になりながらも真剣な話し合いを行ったグループもいくつかあります。グループ間の企画の調整で意見が対立する場面もありました。グループ代表として話し合いに参加した生徒は、「最初は、それぞれいい意見を言っていると思ったので、お互いがちょっとずつ企画を変えれば解決すると思っていた。でも、ひとりが自分の意見を強く主張して譲らず、話し合いがまったく前に進まなくなった。そのまま押し切ることもできたけど、その子が自分だけ責められてる気持ちになるだろうし、自分たちにもうしろめたさが残る。みんなが楽しく参加できることが大事。そこで、その子に一度自分のグループに帰って話し合ってくるように言った。その間に、残ったメンバーに、その子がもちかえってくる意見をとにかく受け入れて、自分たちが少し企画を変えることで対応しようと提案した。みんなも賛成してくれて話し合いをまとめることができた」と語っていました。本番当日は、サマキャンに参加していない日章学園高校の生徒をゲストに迎え、ダンスをしたり、みんなで一本ずつ花を挿して生け花の作品をつくらったり、紙で作ったカエルでレースをするなど、さまざまな企画を一緒に楽しみました。

サマキャン☆文化祭の企画を話し合う日中の高校生。



#### ▣ 同じ高校生として

帰国後も、仲良くなった中国の高校生とチャットでやりとりを続けている参加者もいます。ある日本の高校生は、「以前は報道で伝えられる中国という国に対していいイメージがなかった。でも、少なくとも今回自分が知り合った中国の高校生はとてもやさしい気持ちをもって。毎日たくさんのことを話した。最近はチャットで尖閣諸島のことをどう思うか聞かれることもある。毎日考えているけど正直答えはわからない。でも、このことで中国の友だちとの関係が変わると思わない」と言います。東京から参加した女子高生は、「同室の子が日本にとても興味のある人だった。わたしよりよく知っていることがあって驚くこともあったし、日本をもっと知りたいという思いが強くてすごくいい刺激をもらった。同じ高校生としてたくさんのが話せた。そ

ういう友だちができたことがいちばん大きかった」と話してくれました。彼女は、帰国後ご両親に「参加させてくれてありがとうございました。これはちゃんと言わないと、と思って」と伝えたそうです。そのことばを聞いて、ご両親は「体調をくずすなど思うような学校生活を送れないときもあったけれど、このサマーキャンプで大切な経験をたくさんしてきたんだと思い、涙が出た」と話してくれました。(室中直美)

### 「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」

日本で中国語を学ぶ高校生のためのプログラム(漢語橋)と、中国で日本語を学ぶ高校生のためのプログラム(日本語橋)の合同開催により、本サマーキャンプを実施。

❖漢語橋 主催……………中国国家漢弁  
 実施……………公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)  
 受け入れ機関…長春日章学園高校  
 助成……………双日国際交流財団  
 協力……………文部科学省  
 後援……………外務省  
 特別協力……………ANA

❖日本語橋 主催……………吉林省教育学院、長春日章学園高校、  
 公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)  
 助成……………国際交流基金北京日本文化センター、  
 双日国際交流財団

は、OB有志による提案で実現しました。Facebookには「漢語橋日本高校生夏令営・サマキャンOB会」という非公開グループのページが開設され、告知や近況報告に使われています。

「元気〜?」「懐かしい!」久しぶりの再会をよろこぶ声があふれました。参加年度ごとに当時のエピソードや近況を披露してくれました。

「漢語橋と一緒に参加した仲間が中国語を使って自分の夢を実現するため羽ばたいているのを聞くと、私も負けてなんかいられないと、新たな決意が湧きあがってきます」「漢語橋は人生を変えたイベントでした。全国の仲間や、高校時代の自分を厳しく叱ってくれたスタッフの方々がいたおかげで、今の自分がいます。一人でも多くの高校生が漢語橋を通して、中国に興味をもってくれることを願っています」

すでに社会人や大学生となっている人が多く、当時を知る関係者にとって、立派に成長した姿はとても頼もしく、キラキラと輝いています。

TJFは、サマーキャンプOB、OGとのつながりを今後も大切にしていきたいです。中国語を学ぶ現役高校生たちにとって、先輩たちの活躍する姿が学習の大きな励みとなるとともに、将来の夢をさらに大きく描くことにつながると思います。第2回同窓会でOB、OGと再会するのを楽しみにしています。(藤掛敏也)

### 中国のサマーキャンプ同窓会を開催

## 6期にわたるOB、OGがつながった

8月11日(土)に「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ 同窓会」を東京で開催しました。2007年から2012年まで過去6回の参加者37名、引率でお世話になった先生4名が参加し、留学先の中国・上海から駆けつけたOBもいました。今回初開催となるこの同窓会

### 高校の韓国語中国語教師研修

## 「学習のめやす」研修、4年の成果

今年で4回目となる2012年高等学校韓国語中国語教師研修および外国語担当教員セミナーを、初めて大阪、関西大学で8月3日(金)～7日(火)に開催しました。参加者は、関西だけでなく全国、さらには韓国や中国、米国、豪州からも集まり、97名に上りました。前半3日間は、中国語、韓国語だけでなく、英語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、日本語に携わる教師が会場に集いました。

### ■テーマは評価

今回は「学習者の人間的成長を促

懐かしい顔、初めて会う人。  
 サマーキャンプでつながる。



4回の研修会の全日程に参加した3人に皆勤賞が贈られた。そのひとり、岸先生は「講義で聞いたことをグループで実際にやってみることはしんどかったけれど、頭の理解だけで終わらなかったのはよかったし、刺激し合える仲間ができた。大阪から東京に行くのは、全く苦ではなかった」と研修会をふり返った。

す外国語教育—学習動機と学習効果を高める評価」をテーマに取り上げました。主任講師の當作靖彦氏(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)は、これまでの研修会で「よいテストは、よい学習者をつくる、よいテストは、よい教師をつくる」と繰り返し評価の重要性を強調していました。参加者から研修で取り上げてほしいテーマとして最も多くの声があがったのも評価であり、教育現場からの期待も大きなものがありました。

今年3月にTJFが発表した『外国語学習のめやす2012』では、最初に関心や単元の目標を設定し、次にその目標が達成されたかどうかを測る効果的な評価をつくることを推奨しています。そして、目標と評価をあらかじめ学習者に知らせておきます。これまでは、単元が終わった段階でテストをつくり、評価するケースが多かったのですが、こうすることで、学習者にいい成績をとらせるために、教師は授業内容をどうしたらいいのか、学習者はどうしたらいい成績がとれるのか、より明確になり、学習が効果的に進むようになります。

今回の研修では、ルーブリックを使って評価に取り組んでもらいました。ルーブリックとは、縦軸に評価項目(例:言語機能、文法、語彙、発音、談話のレベル、流暢さなど)を置き、横軸にはその到達レベル(例:目標以上を達成、目標を達成、目標に向かって努力中)を設定した評価基準表です。日本語学習者が書いた作文のサンプルを評価するルーブリックを研修生がペアで作成しました。そのルーブリックで採点した後、隣のペアが作ったルーブリックと交換して別のサンプルを評価し、参加者間でディスカッションを行いました。研修後半の韓国語と中国語教師に分かれて行ったグループワークでも、課題として出された活動を評価するためのルーブリックを作成しました。



アンケートには「2学期からすぐに取り組みたい!」「ぜひ、取り入れものにしたい!」と書きこまれていて、今回取り上げた評価の手法は、教師にとって実践につながるものだったようです。

#### ■4年間の成果

4年にわたる「学習のめやす」研修は、開発過程にあった『学習のめやす2012』の理念から実践にいたる内容を、現場の状況にあわせて改善し、教師とともに検討する場でもありました。「『めやす』の考えに賛成するが、どうやって実践したらいいかわからない」との声を受け、文字・音声、語彙・文法表現の教え方の見直しを提案したり、「決められた教科書があって『めやす』の考え方を取り入れるのは難しい」という現場の状況にあわせて、教科書調理法(テキストブックアダプテーション)を取り上げたりしました。毎回の研修会で得られた声も、「めやす2012」の開発における課題となり冊子にも反映されています。

また、當作氏からは「私たちは、外国語教師である前に、教育者である」という問いかけが何度となく行われました。言語の枠を超えて集まった外国語教師たちにとっては、あらためて外国語教育のあり方を見直すこととなり、「めやす2012」が提案する、学習者の人間的成長を促す外国語教育の考え方が次第に浸透していきました。

その結果、各言語の研究会で「めやす」をテーマとするワークショップが開催されるようになり、研修参加者が中心になって、さまざまな外国語を担当する教師が授業実践について考える、外国語授業実践フォーラム(代表:山下誠氏)が設立されるなど、新しい潮流が生まれています。

#### ■今後の課題

TJFは、「めやす2012」の普及を目的とした研修をこれからも実施していきます。今後は、東京、大阪以外の地域での開催や、1日から2日程度の参加しやすいプログラムを提供するなど、「めやす2012」の提案をより多くの人々が共有し、実践に結びつけることをめざしたいと考えています。また、研修参加の動機を高めるための工夫についても検討していきたいと思っています。

(中野敦)

評価の基準表づくりに真剣に取り組む。

インタビューに夢中になり、  
気がついたら予定時間をオーバー。



## 中国大連市で日本語教師研修を実施 インタビューって楽しい!

大連教育学院と共催で、大連市内の中学校日本語教師を対象とする研修会を8月29日(水)～30日(木)に実施しました。新学期が始まる直前の多忙な時期だったにもかかわらず、20名の教師が集まり、研修への関心の高さがうかがえました。TJFは一昨年度から、遼寧省瀋陽市や吉林省長春市でコミュニケーション能力を育む生徒参加型の学習活動を考える研修を実施しています。今回は、教師が生徒役になって、そうした活動を体験してもらいたいと考えて、大連に住む日本人へのインタビューを作品にまとめて発表するプロジェクトワーク「大連に住む日本人と出会おう—その人と大連のつながりを知ろう」を取り入れました。

このプロジェクトワークを通じて、日本語の4技能(読む、書く、話す、聞く)の向上を図るだけでなく、インタビューしたことをわかりやすく効果的に発表する、日本語運用に自信をもつ、グループで協力して活動を進める、プロジェクトワークの手法を自身の授業に活用する可能性を探る、インタビューを通じて大連について新たな発見をすることなどを目標として設定しました。

### ■日本語力を総動員したインタビュー

1日目の午前は、20名の参加者を6つのグループに分けて、大連に住む日本人6人に取材する準備です。IT企業経営者、日本語学校経営者、雑誌編集者、留学生などさまざまな経歴をもつ6人のプロフィールを読み、グループごとにインタビューしたい人を選びます。どんな質問をすればその人と大連のつながりを知ることができるか、各人が考え、それをグループで共有・分類・整理した後、講師やTJFス

タッフを相手に練習をして、午後の本番に備えます。

各グループの代表が電話で会う場所を確認するところから、午後の活動は始まります。午前中に練習したとおり、手作りの名刺を渡して自己紹介をし、インタビューに応じてくれたことについてお礼を述べて、取材開始です。用意した質問をするだけでなく、相手の答えを聞いてさらに質問を追加したり、話を膨らませたりして、日本語の聞く力、話す力、時にはわからないことばを書いてもらうなどコミュニケーションするための日本語力を総動員したことで、研修生たちは「日本語を使った」と実感できたようです。また、聞きたいことが聞けたか、答えがテーマにつながっているか、もっと聞きたいことがあるか、グループの仲間と確かめ合いながら1時間のインタビューを終えました。研修会場に戻ってきた研修生は、興奮しながら、「楽しかった!」「日本人と初めてこんなに日本語で話した!」「大連に住む日本人のたちの生活や思いを知ることができた」「〇〇さんの人生に感銘を受けた」と感想を述べていました。

その人と大連のつながりをもっとも表すキーワードは何か、その人の何を伝えるべきか、どんな写真を使ってどういうふうにとめるべきか、などをグループごとに活発な意見交換をしながら構成を考えましたが、なかなかまとまらず苦勞していたようです。

### ■インタビューした方々の人生にふれて

2日目の午前はパワーポイントで作品を仕上げ、午後にはインタビューした方々を招待して発表です。インタビューした人の生き方に自分の人生を重ね合わせたり、同年代の中国人たちの生き方と比較したり、画像や音楽をふんだんに取り入れたり、クイズ形式にしたりと、どの作品も工夫が凝らされていました。取材に協力して下さった日本人の方からも、「自分自身がこんな風に見られているなんておもしろい体験だ」と感想が上がりました。

発表を聞くにあたって、どの点を評価すべきかあらかじめ評価基準表を配り、一人ひとりに、それぞれの作品を評価してもらいました。「何となく」良かった、悪かった、と判断するのではなく、ある基準にもとづいて評価を行うことを研修生に体験してもらうためです。

初めてパワーポイントを使って発表。



## ■プロジェクトワークで自信を得た

研修会後にプロジェクトワークについてふり返り、ワークシートに記入してもらったところ、「本物の言語環境が体験できてよかった」「グループ活動で協力することの大切さを学んだ」「自分の知識が少ないことがわかっただけでなく、ほかの先生の良いところを学ぶことができた」「評価の仕方を学んだ」という声が多く上がりました。そして、「今回体験したことを生徒にも体験させることができる」と手応えを感じた教師も多くいたようです。

今回の研修のもう一つの大きな成果は、研修生と大連に住む日本人がインタビューを通じてつながったことです。学校現場からは生徒と日本人を交流させたいという要望が頻繁に寄せられており、今回の出会いが、新しいクラス活動につながっていくことを願っています。  
(森本雄心)

を学習している中学1、2年生950名全員を対象に『好朋友』を使った二外日本語の授業を実施することに決定しました。いま教師を探しています』『『好朋友』を使ってみます。使った感想を知らせます』といったメールが帰国後すぐに次々と届いたのです。

『好朋友』は、学習者に日本語の学びを通じてさまざまな背景をもつ人びととつながる力を身につけてもらうことをめざしています。来年開かれるこの校長連絡会で『『好朋友』を使った日本語教育』がテーマのひとつに選ばれたことから、『好朋友』がめざす日本語教育が多くの人たちに受け入れられ、今後中国各地に広がる可能性を感じる3日間となりました。  
(水口景子)

2012年7月・8月・9月

## ほかにこんな活動をしました

### 中国の日本語教育

## 『好朋友』が中国全土に広がる兆し

9月6日(木)～8日(土)、中国大連市で「2012年中等日本語教育設置校校長フォーラム・日本語教師検討会」が開かれました。この時期は新学年が始まった直後であると同時に、9月10日の「教師節」の直前でした。中国の学校にとって教師節は全校をあげて教師に感謝の意を表すイベントを行う日で、準備にも時間をかけます。そうした状況にもかかわらず全国11省13校の管理職と日本語教師に加え、大連市内で日本語教育を実施している学校の校長と教師、合わせて約100名が参加しました。

このフォーラムを主催したのは、2011年3月に設立された民間のネットワーク組織「中等日本語教育設置校校長連絡会」で、設立の呼びかけ人は、上海甘泉外国語中学、北京月壇中学、長春第一外国語中学の校長3人です。これら3校は、歴史的にも規模からいっても、中等教育における日本語教育を牽引してきました。この組織に加盟しているのは18校で、管理職や教師間の情報交換を通じて、日本語教育の普及と質的向上を図ることをめざしています。今年は「日本語教育を特色とする学校づくり」をテーマに4校の校長がそれぞれの学校での取り組みを報告しました。

TJFは、大連教育学院と共同で作成した中学校向け日本語教材『好朋友』を使った日本語教育を直接働きかけることができる絶好の機会だと考え、会議に参加するとともに、TJFが『好朋友』や中国の日本語教育事業について発表する機会をもらいました。この成果はすぐに現れました。発表後、何人もの先生が『好朋友』に関心を示してくれただけでなく、「校長と相談して第一外国語として英語

- 第5回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト東日本予選大会 (工学院大学孔子学院主催)を後援[7月/東京]
- 第5回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト西日本予選大会 (中華人民共和国駐大阪総領事館教育室、立命館孔子学院共催)を後援[7月/京都]
- 高校生のための中国語講座「楽しく学ぼう! 中国語」をISI国際学院と共催[5～7月、毎週土曜日/東京]
- 『国際文化フォーラム通信』no.95「未来を生きぬく力」を発行[7月]
- 平成24年度高等学校中国語担当教員研修を文部科学省、中国教育部、中国国家漢弁と共催[7～8月/中国長春市]
- 国際韓国語教育学会第22回国際学術大会で「学習のめやす」について発表[8月/韓国ソウル]
- 「協働を生み出すプログラムづくり」事業の一環として、台湾の高雄市立高級工業職業学校の教師と生徒を沖縄県立向陽高校に招聘[8月/沖縄]
- 実践サポートめやすwebに「チャレンジ」コーナーをオープン[8月]
- 「中高校生のための韓国語講座2012」を駐日韓国大使館韓国文化院、同世宗学堂と共催[2012年5月～2013年3月、毎週土曜日/東京]
- 『事業報告2011-2012』(日本語版)を発行[9月]

# 掲示板

## 高校生素顔を紹介する写真とエッセー作品募集中!

TJFが海外向け広報に協力している、よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」で身近なひとりの高校生の素顔を、5枚までの組写真と200字程度の文章で紹介する作品を募集しています。受賞作品は読売新聞に掲載されるほか、TJFのウェブサイトでも公開します。世界の人たちに自分の作品を見てほしい、大切な友だちを紹介したい、という高校生が身近にいらっしゃる方はぜひこのコンテストを知らせてあげてください。

**応募資格** ……2012年4月現在、日本および海外の高等学校、またはそれに準ずる学校に在学している方

**応募作品** ……ひとりの高校生(自分自身を除く)を主人公とする、2~5枚の写真と文章(200字程度)

**締め切り** ……2012年11月20日(火)

**発表** ……2013年1月中旬

募集要項など詳細は、[link.tjf.or.jp/tw2](http://link.tjf.or.jp/tw2) をご覧ください。

## 中国語教育取り組み校経験交流会を実施します

中国語教育や中国との交流に取り組む高等学校の校長を中心とする管理職の方々にお集まりいただき、それぞれが抱えている課題を共有したり情報交換したりする「経験交流会」を実施します。奮ってご参加ください。

**期日** ……2012年12月15日(土) 14:00~17:00

**場所** ……TJF会議室(東京都文京区)

**対象** ……中国語・中国理解教育に取り組む高校の責任者(理事長、校長、副校長、教頭)、中国語教育推進地域の教育行政関係者

**主催** ……TJF

**参加費** ……無料

**締め切り** ……11月26日(月)

申込フォームは[link.tjf.or.jp/kc2012](http://link.tjf.or.jp/kc2012) からダウンロードしてください。

## ウェブサイト「くりっくにっぼん」が新しくなりました!

TJFだからこそ発信できる「情報」とは何か、私たちが伝えたい「日本」とは何か、について検討を重ね、日本の情報を発信する「くりっくにっぼん」のコーナーをすべて一新して、リニューアルオープンしました。

新生「くりっくにっぼん」では、おもに次の三つのコーナーで、「人」の視点に迫ります。

**My Way Your Way** ……あるテーマを取り上げ、それに関連する人たちへのインタビューを紹介

**1/365** ……日本の高校生や大学生の行事を中心とする日々の過ごし方をレポート

**何これ? マジコレ!?** ……海外から来日した中高生や大学生が発見した「日本」を写真で紹介

これらのコーナーを通じて、さまざまな人に出会い、考えていることや思いを知ることができます。人との出会いこそが、何よりも心を動かし、私たちの思考を刺激し、行動を引き出すのではないのでしょうか。

日本に関心をもってこのウェブサイトを訪れる人たちが、日本に限らず広く異文化や外国語、異なる価値観と出会うことの楽しみを知る、そんな場になればと願っています。ぜひ日本の若い人たちにも読んでほしいと思います。同じ日本に暮らしている私たちにもさまざまな生き方や考え方があること、海外の同年代の人たちから私たちの日常はどう見えているのかなど、多くの気づきが生まれることでしよう。

新しくなった「くりっくにっぼん」を多くの場でご活用ください。



[www.tjf.or.jp/clicknippon/ja](http://www.tjf.or.jp/clicknippon/ja)

●「机を移動して3人のグループをつくってください」。授業でグループ学習をしようとしたときのことだそうです。机三つの合わせ方に戸惑ったり、座ったまま動くとしなかつたり……。これは幼稚園でも小学校のことでもなく、ある高校の話です。三つの机を寄せてうまく配置することができず、生徒自身も苦笑していたといいます。ただ座って先生の話を聞く授業スタイルに慣れすぎてしまったこと、受験勉強で答えがひとつの世界にどっぷりつかってしまったことが背景にあるのでしょうか、と先生が言ったことが印象的でした。

●「分析力」「思考力」「伝える力」「協働力」「創造力」「ICT活用力」……。今の子どもたちには多くの力が求められています。いずれもさまざまな場面で経験を積み重ね、徐々に身につけていくものです。授業は、教科の内容を学びながらこうした力を身につけるトレーニングには最適の場です。ただし、やみくもに運動すれば身体が鍛えられるわけではないのと同様、トレーニングを効果的なものにするためには、研究や理論に裏づけられた方法に則って授業をデザインすることが必要です。

●アメリカでは、2050年までには伝統的な「教師」という仕事はなくなるとの予測が出ているそうです。「教師」はカリキュラムデザイナーという職業に取って代わられるだろうと、ある先生がおっしゃっていました。

●今回の特集に出てくる、「知識構成型ジグソー法」やシンキング・ツールは、教科の枠を超えて、また、子

どもの発達段階にあわせて使えるように開発されたものです。子どもたちの興味や関心に沿いながら、こうしたツールを活用して授業をまさにデザインしていくことが必要なのではないでしょうか。そうした学びを繰り返すことで、21世紀に生きる力が子どもに備わってくるのだと思います。

●TJFは今、学びをいかにデザインするかにチャレンジしています。例えば、沖縄、大阪、台湾の学校の先生たちと一っしょに協働を生み出すための年間のカリキュラムづくりをしています。ことばも文化背景も異なる三つの高校の生徒が、テレビ会議システムなどを利用してさまざまな課題に取り組むなかで、「コミュニケーション力」「表現力」「創造力」が鍛えられています。また、毎夏実施している「互いのことばを学ぶ日中高校生の交流プログラム」では、日中の高校生が、「サマキャン☆文化祭」を企画、実施していく過程で、伝えたいことがなかなか伝わらないもどかしさを感じながらも、ともに何かを創りだしていく力を身につけられるよう、10日間の活動をデザインしています。

●これからの時代を生きぬく力の育成という目標に向かって研究や実践に取り組んでいる人たちがまだまだたくさんいます。こうした人たちの力を借りながら、ことばと文化の学びと交流の場をデザインしていきたいと思ひます。

水口景子

編集後記

## 国際文化フォーラム通信96号

2012年10月

発行人 ……内藤裕之  
編集人 ……水口景子  
アートディレクション ……鈴木一誌  
デザイン+DTPオペレーション ……大河原哲  
出力・印刷・製本 ……凸版印刷(株)  
校閲・校正 ……天山舎  
表紙写真 ……大木茂  
(写真は運転教習用の車、モロッコ・タイトワンで撮影)

## 公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013

東京都文京区音羽1-17-14

音羽YKビル3階

Phone: 03-5981-5226

Fax: 03-5981-5227

E-mail: [forum@tjf.or.jp](mailto:forum@tjf.or.jp)

[www.tjf.or.jp](http://www.tjf.or.jp)